

# 貴重図書紹介——モーリス・ユトリロ他による挿絵本『葡萄酒、花、炎』

Discussion of a Rare Book—*Vins, Fleurs et Flammes*, Illustrated by Maurice Utrillo and Other Painters

黒澤 美子

KUROSAWA Yoshiko

石橋財団コレクションには1952年にパリのベルナール・クライン社から刊行された『葡萄酒、花、炎(原題: Vins, fleurs et flammes)』という挿絵本が収蔵されている。本稿はその紹介と、今後の調査研究課題をまとめることを目的とするものである。

『葡萄酒、花、炎』は20世紀フランスの作家12名が書いた、ワインにまつわるテキストにより構成されている。作家ジョルジュ・デュアメル(1884–1966)の序文に加え、古文書学者ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス(1903–1985)や小説家コレット(1873–1954)、詩人ポール・ヴァレリー(1871–1945)などが執筆者に名を連ねている。挿絵も複数の画家によって手がけられており、モーリス・ユトリロ(1883–1955)やモイーズ・キスリング(1891–1953)、藤田嗣治(1886–1968)といったエコール・ド・パリの画家に加え、ラウル・デュフィ(1877–1953)やモーリス・ド・ヴラマンク(1876–1958)らフォーヴィスムの画家など、12名の芸術家が参加している。綴じなし製本に挿絵プレートが挿入されている体裁で、目次と挿絵位置は以下の通りである。

## 目次と挿絵

《表紙絵》ジャック・ヴィヨン

《目次に記載のない挿絵》(\*)

p. 9 「序文」ジョルジュ・デュアメル

挿絵1 《9月の葡萄畑》ラウル・デュフィ

挿絵2 《葡萄用の大きな荷車》ラウル・デュフィ

p. 19 「ワイン – 精神 – 血」マックス・ジャコブ

挿絵3 《最後の晩餐のワイン》マックス・ジャコブ

挿絵4 《葡萄の女王の行列》マックス・ジャコブ

p. 35 「ディオニュソスのワイン」ロジャー・ヴィトラック

挿絵5 《黄金時代と約束の地》アンドレ・ドラ

挿絵6 《ディオニュソスの深紅の船》アンドレ・ドラ

p. 43 「あゝ、ワイン」ラウル・ポンション

挿絵7 《ミュージシャンたちの酒場》モーリス・ユトリロ

p. 49 「セイレーンたちのワイン」トリスタン・ドゥレーム

挿絵8 《セイレーンたちのカフェ》モイーズ・キスリング

p. 55 「劇的な陶酔について」ルイ・ジューヴェ

挿絵9 《座るバッカンテ》ジャン・コクトー

挿絵10 《立てるバッカンテ》ジャン・コクトー

p. 63 「ワイン」コレット

挿絵11 《樽と荷かご》デュノワイエ・ド・スゴンザック

挿絵12 《コレットのお昼寝》デュノワイエ・ド・スゴンザック

挿絵13 《サントロペの葡萄の収穫》デュノワイエ・ド・スゴンザック

p. 69 「栄光のワイン」マク・オルラン

挿絵14 《ほろ酔いの新兵》ジェン・ポール

挿絵15 《兵隊と小瓶》ジェン・ポール

p. 77 「テーブルクロスの上のワイン」ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス

挿絵16 《上手に行われた記念日》藤田嗣治

p. 85 「海のワイン」フェルナンド・フルーレ

挿絵17 《船出のワイン》モイーズ・キスリング

p. 91 「安物の赤ワインから乾杯用のワインまで」モーリス・フォンブール

挿絵18 《トリコロールのワイン》モーリス・ユトリロ

挿絵19 《労働者の酒瓶》モーリス・ド・ヴラマンク

p. 99 「海に消えたワイン」ポール・ヴァレリー

挿絵20 《音楽のフレーズ》アルテュール・オネゲル

(\*)後述の本書1953年版と藤田嗣治のカタログレゾネから、藤田の版画作品《ガーデン・パーティー》であると思われる。<sup>1</sup>



fig. 1

ジョルジュ・デュアメルほか著『葡萄酒、花、炎』ならびに、ルネ・エロン・ド・ヴィルフォス著『我らの葡萄畑をめぐって』の外箱、1952年刊

石橋財団アーティゾン美術館蔵

The Case of Wines, Flowers and Flames, text by Georges Duhamel, et al. and Across Our Vineyards, text by René Héron de Villefosse, published in 1952. Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo

305部限定で刊行されたなかで、当館が所蔵する版はエディション番号13番目にあたる。当館所蔵の版には、アンドレ・ドラン(1880-1954)が手がけた挿絵《黄金時代と約束の地》の銅版原版が付属していることが特徴である。当館所蔵の版に限らず『我らの葡萄畑をめぐって(原題:À Travers nos vignes)』<sup>2</sup>というタイトルの挿絵本と2巻組となっており、背に「VINS(ワイン)」と書かれた箱に2冊併せて収納されるかたちとなっている(fig. 1)。2冊とも、本文に挿入された挿絵に加えて巻末に挿絵だけが重複してもう1セット、さらにその白黒コピーがもう1セット付属している。挿絵だけを抜き出して額装展示できるような仕様になっていると考えられ、読みものとしてだけでなく、部屋に飾ったり鑑賞したりする目的も兼ねて制作されたことが窺える。初版から1年後の1953年と、さらにその後の1956年に、一部挿絵を入れ替えた改訂版の刊行が重ねられており、販売物として本書が一定の成功を収めたのではないかと推測される<sup>3</sup>。

12章ある各テキストの内容は多方面に及ぶ。序文において作家ジョルジュ・デュアメルは、「ワインは自分だけの楽しみではありません。社会的な楽しみなのです。まさに、人と人が心を通わせるために欠かせない要素の一つなのです。」と述べ、フラ

ンスのブルジョワ階級とワインの関わりに触れるなどの小論を展開しているが、本書刊行の目的や経緯についてはとくに明言していない。また各テキストの間にはワイン関連の主題という以上の繋がりや共通する傾向もとくに見受けられない。例えばトリスタン・ドゥラーム(1889-1941)の「セイレーンたちのワイン」は、ワインを飲みながら会話に興じる人々が、人魚かもしれない不思議な少女に出会ったという話が展開される短い物語であり、エロン・ド・ヴィルフォスの「テーブルクロスの上のワイン」は、18世紀末から19世紀初頭的美食家グリモ・ドゥ・ラ・レニエール(1758-1837)の著作<sup>4</sup>を引き合いにだすなどして、人をもてなすためのワインの銘柄や知識を羅列した案内書のような随筆である。最終章にあたるポール・ヴァレリーの「海に消えたワイン」は、捧げものをするような気持ちで海に注いだ赤ワインの赤い色が波間に消えて無と化していく一瞬の様子を、夢げに綴った詩となっている。



fig. 2  
挿絵7: モーリス・ユトリロ《ミューズたちの酒場》、リトグラフ、ポショワール  
Illustration no. 7: Maurice UTRILLO, *Cabaret of Muses*, Lithograph and pochoir



fig. 3  
モーリス・ユトリロ《ミューズたちの酒場》部分  
Maurice UTRILLO, *Cabaret of Muses* (Detail)



fig. 4  
挿絵17: モイーズ・キスリング《船出のワイン》、リトグラフ、ポショワール  
Illustration no. 17: Moïse KISLING, *Wine of Departure*, Lithograph and pochoir



fig. 5  
モイーズ・キスリング《船出のワイン》部分  
Moïse KISLING, *Wine of Departure* (Detail)





fig. 6  
挿絵19: モーリス・ド・ヴラマンク《労働者の酒瓶》、リトグラフ、ポショワール  
Illustration no. 19: Maurice de VLAMINCK, *Liter of the Worker*, Lithograph and pochoir

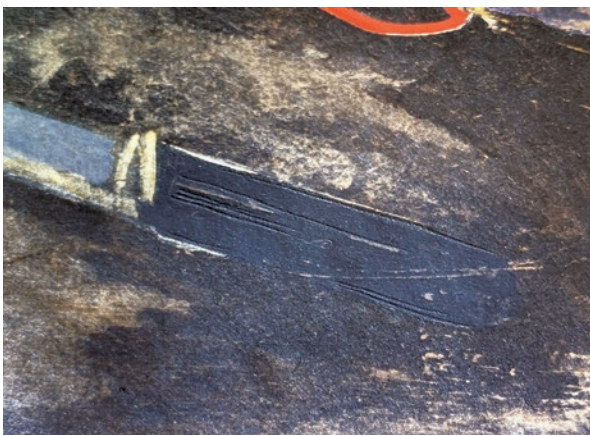


fig. 7  
モーリス・ド・ヴラマンク《労働者の酒瓶》部分  
Maurice de VLAMINCK, *Liter of the Worker* (Detail)

それぞれのテキストに挿入された挿絵には、文章を説明したり補遺したりするほどの役割は担わされていないものの、文章の内容と関連する画題が描かれている。ワインにインスピレーションを得ながら創作する詩人についてうたったラウル・ポンション (1848-1937) の詩「あゝ、ワイン」には、『ミューズたちの酒場』というタイトルが付けられたユトリロの挿絵があしらわれている (fig. 2)。モンマルトルを中心にパリの街並みを描いた画家として知られるユトリロらしく、酒場のある街並みとそこに行き交う人々の日常を捉えた一枚となっている。リトグラフにさらに、切り抜いた型の上から刷毛で彩色するポショワール (ステンシル) 技法が用いられており、版画作品でありながらも1点ごとに異なる筆致が残るオリジナル性が有されている (fig. 3)。このリトグラフとポショワールを組み合わせる技法により、キスリングの《船出のワイン》 (fig. 4) に見られる雲の厚みの表現 (fig. 5) や、ヴラマンクの《労働者の酒瓶》 (fig. 6) における黒の繊細な描き分け (fig. 7) が実現されている。こうした絵画表現が、本書の美術的価値を大いに高めていると言えるだろう。

本書の挿絵には、エッチングによって制作された白黒の作品も含まれている。アンドレ・ドランの《黄金時代と約束の地》は、

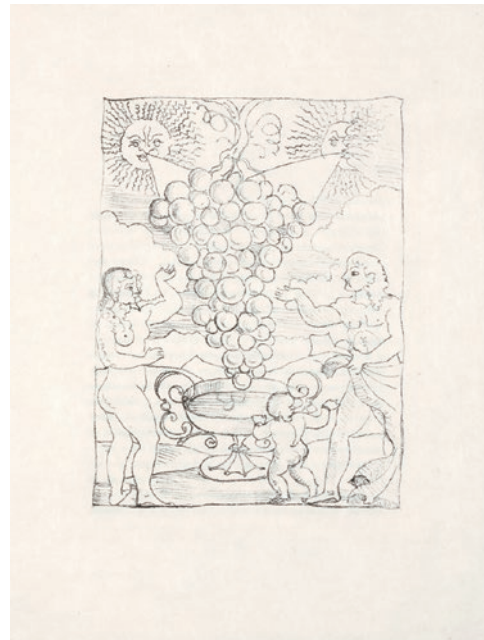


fig. 8  
挿絵5: アンドレ・ドラン《黄金時代と約束の地》、エッチング  
Illustration no. 5: André DERAÏN, *Golden Age and Promised Land*, Etching

中央に大きな葡萄が吊り下げられた図像で、葡萄の下には盃が、その周りには男女と子どもが描かれている (fig. 8)。画面左上には太陽が、右上には月が葡萄に向かって光を放ち、背景にはなだらかな丘陵地帯が見える。この絵のタイトルにある「黄金時代」が指すものは定かではないが、「黄金時代」と言えば、古代ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』に書かれた、天地創造直後の調和のとれた楽園時代のことが想起される。同場面には、自然のなかで人々が仲良く果実を摘んだり盃を酌み交わす場面がよく描かれた<sup>5</sup>。ドランはこの画題に他の作品でも取り組んでいる<sup>6</sup>。一方で「約束の地」とは旧約聖書にでてくるカナン、すなわち神がアブラハムの子孫に与えると約束した場所を指しているだろう。とても肥沃な土地であったため、大人2人で運ばなければならないほど大きな葡萄が採れたという逸話が残っており、人体より大きなサイズで描かれる「カナンの葡萄」は西洋絵画において繰り返し描かれてきたモチーフである<sup>7</sup>。同時に、この挿絵に描かれている大きな葡萄からは、キリスト教絵画の文脈における「神秘的葡萄絞り器」という表現も連想せざるを得ない。約束の地カナンから運ばれ、葡萄絞り器の下におかれたひとふさの葡萄にキリストをなぞらえ、人々に迫害され血を流すキリストを象徴する図像のことで、葡萄が吊るされる様は、キリストが十字架に磔にされることの予型として描かれることもあるという<sup>8</sup>。中世や初期ルネサンスの絵画における磔刑図では十字架の両脇に太陽と月がしばしば登場したことを鑑みると<sup>9</sup>、この挿絵における葡萄が磔の場面を暗喩している可能性も否定できない。さらなる図像学的分析や、同作家の他作品との関係性の調査は今後の課題である。本稿では、こうしたさまざまな意味を想起させる挿絵が、単に飲み物である以上の、西洋の人々の精神世界を形づくってきたものとしての葡萄酒に想



fig. 9  
東京国立近代美術館アートライブラリ所蔵『葡萄酒、花、炎』、  
エディション292番のためのモーリス・ブリアンションによる挿絵  
Maurice BRIANCHON, Illustration for *Wines, Flowers and Flames*,  
edition no. 29, Art Library, The National Museum of Modern Art, Tokyo  
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 C3639

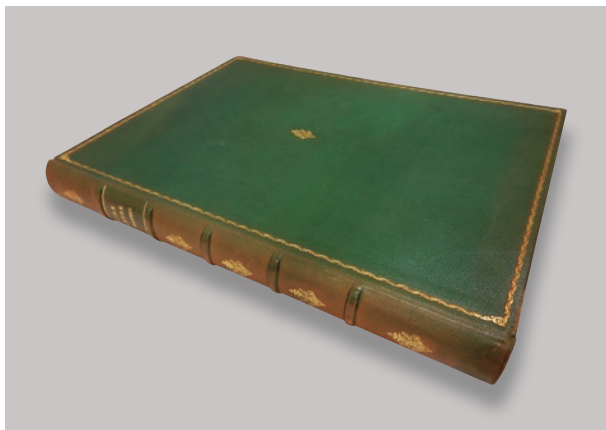


fig. 10  
東京富士美術館所蔵『葡萄酒、花、炎』、エディション47番  
*Wines, Flowers and Flames*, edition no. 47, Tokyo Fuji Art Museum

いを巡らせる役割を果たし、本書に深みを与えていることを指摘するとどめたい。

本書は当館の他に、国内では2点が他の美術館に所蔵されていることが確認されている。1点は東京国立近代美術館に所蔵されており、藤田嗣治の旧蔵図書コレクションに含まれる1冊である。エディション番号292番と記されている同書には、藤田と妻・君代のために特別に印刷されたものであることが明記されている。さらに、モーリス・ブリアンション直筆のメッセージが添えられた追加図版が1枚含まれていることが特筆に値する (fig. 9)。もう1点は東京富士美術館の所蔵である。エディション番号は47番と記されており、旧蔵者の手により革装幀の冊子に綴じられたかたちとなっている (fig. 10)。そこには『我らの葡萄酒をめぐって』は含まれておらず、おそらくまた別の冊子として製本されたうえ、どこかで離別してしまったことと推測されよう。また、東京富士美術館には1953年版の『葡萄酒、花、炎』

も所蔵されている。こちらは綴じられていない状態で、『我々の葡萄酒をめぐって』と2冊で1つの箱に収納されるオリジナルの体裁を残す。1952年の版と比べるとひとまわり小さく、文章は同じ内容であるものの、挿絵が一部入れ替わったり削除されているほか、紙面の装飾デザインなどに違いが確認された。

本書は日本では、上記所蔵館のものが、藤田嗣治が手がけた挿絵本という文脈で、藤田の展覧会で紹介された例があるものの、本書について詳しい解説や論述がなされたことはない<sup>10</sup>。そればかりか、フランスの挿絵本の主要研究書においても、本書への言及は皆無に等しい状況である<sup>11</sup>。ワインの文化史を主題とした書籍においても、とくに紹介されていない<sup>12</sup>。特定の個人作家による制作ではないことから作家研究の延長で究明される機会にも恵まれなかったのであろう。しかし20世紀の著名な作家や画家が参加した本書は、挿絵本という媒体を通して行われた同時代作家たちの交流の一側面を伝える重要な資料であり、考察が待たれる書籍であることに疑いはない。今後はまず、複数の版や、同じ版のなかでもエディションごとに異なる点を比較し、本シリーズの全体像を把握することが求められる。そして各挿絵について、図像学的分析や、各作家の制作史のなかでの位置付けを行うことも重要であろう。一部の挿絵には原画とみられる既存作品が確認されているため、各挿絵が本書のための描き下ろしか、既存の作品に基づくものかという調査も進めていきたい<sup>13</sup>。加えて、本書が刊行された目的や制作の背景を探り、また当時の美術界や出版界にどう受け止められたのかを知ることができる資料を丹念に辿ることで、本書刊行の意義や影響まで考察することを目指したいと考える。

\* 本書の調査にあたり、東京国立近代美術館の長名大地様ならびに同館アート・ライブラリの皆様、東京富士美術館の鴨木年泰様、目黒区美術館の佐川タ子様にご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

(公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館 司書)

## 註

1. Sylvie Buisson, *Léonard Tsuguharu Foujita*, vol. 2, Courbevoie (Paris) : ACR édition, 2001, p. 576, no. 53.48.
2. 『葡萄酒、花、炎』の共同執筆者の一人でもある古文書学者ルネ・エロン・ド・ヴィルフォスが単独で文章を書き、挿絵は全て画家モーリス・ブリアンション (1899–1979) が手がけた。フランスのワイン畑について書かれている。
3. Georges Duhamel, et al., *Vins, fleurs et flammes*, Paris: Bernard Klein, 1953. ; Georges Duhamel, et al., *Vins, fleurs et flammes*, Paris: Bernard Klein, 1956.
4. 文中に書名は名言されていないが、1808年に刊行されたものと述べられているため、『招待主の手引き』(Grimod de La Reynière, *Manuel des amphitryons*, Paris: Capelle et Renand, 1808.)のことを指していると考えられる。同書は、客を食事に招待する者の作法やもてなし方、また献立などについて書かれた指南書である。
5. ジェイムズ・ホール著、高階秀爾監修『西洋美術解説辞典 絵画・彫刻における主題と象徴』高橋達史ほか訳、河出書房新社、2008年、200頁。
6. Michel Kellermann, *André Derain : catalogue raisonné de l'œuvre peint*, Paris: Editions Galerie Schmit, tome 1, 1992, pp. 233, 243, no. 373. ; tome 3, 1999, p. 174, no. 2067.
7. 例えばルーヴル美術館所蔵のブッサンによる四季画のひとつ《秋》(管理番号 INV 7305またはMR 2340)では、秋を表現する画題としてカナンの葡萄を二人の人物が担いで運ぶ場面が描かれている。
8. ジェイムズ・ホール著、前掲書、282頁。
9. 例えばロンドンのナショナルギャラリーに所蔵されているラファエロの《モンドの磔刑図》(管理番号 NG3943)や、ニューヨーク近代美術館や国立西洋美術館に所蔵されているアルブレヒト・デューラーの『大受難伝』:(8) 磔刑》(MoMA管理番号17.37.81, 国立西洋美術館管理番号 G.1970-0008)などの磔刑図が例として挙げられる。磔刑図における太陽と月の図像学の背景や意味については、ジェイムズ・ホール著の前掲書に加えて以下を参照。Gertrude Schiller, "The Crucifixion." In *Iconography of Christian Art*, vol. 2, London: Lund Humphries, 1972. pp. 90–109.
10. 目黒区美術館『レオナルド・フジタ——絵と言葉展』目黒区美術館、1988年、116–117頁。渋谷区立松濤美術館、北海道立近代美術館『藤田嗣治と愛書都市パリ: 花ひらく挿絵本の世紀』2012年、117頁。西宮市大谷記念美術館ほか編『没後50年 藤田嗣治 本のしごと—文字を装う絵の世界—』キュレイターズ、2018年、282頁。
11. 例えば以下を参照。W. J. Strachan, *The artist and the book in France: the 20th century livre d'artiste*, London: Peter Owen, 1969.; W. J. Strachan, *The artist & the book, 1860–1960: in western Europe and the United States*, New York: Hacker Art Books, 1982.; Riva Castleman. *A century of artists books*, New York: Museum of Modern Art, Harry N. Abrams, 1994.
12. 例えば以下を参照。ジルベール・ガリエ『ワインの文化史』八木尚子訳、筑摩書房、2004年。; ジャン＝フランソワ・ゴージェ『ワインの文化史』白水社、1998年。; 内藤道雄『ワインという名のヨーロッパ: ぶどう酒の文化史』八坂書房、2010年。; 山本博『ワインの世界史 自然の恵みと人間の知恵の歩み』日本経済新聞出版、2018年。; ロジェ・ディオ『フランスワイン文化史全書——ぶどう畑とワインの歴史』福田育弘ほか訳、国書刊行会、2001年。
13. 例えばモイーズ・キスリングの挿絵《セイレーンたちのカフェ》は、プティパレ美術館/近代美術財団(スイス、ジュネーヴ)が所蔵する同作家の水彩画《カフェ・ラ・ロトンド》(1912年)と酷似しており、原画と複製画の関係にある可能性が高い。同水彩画については、以下の展覧会図録を参照。マイテ・ヴァレス=ブレッド監修、村上哲、ブレントラスト編『キスリング展』キスリング展カタログ委員会、2019年、22頁、cat.no. 3。